



酒  
志  
錄

附錄筑紫紀行  
全



5  
5579





門へ5  
號5579  
卷



西表旅

其序

おとこはちかたは月一免の九日我作格相井成  
あつり侍類に孝子昌後一序新碑と佛法少  
建て表に送書名折句と刻と喜小 惠好と名  
銘と顯し地を病中の唯といひを辨せ名  
向とい新終平のふ一きり地を書道に記



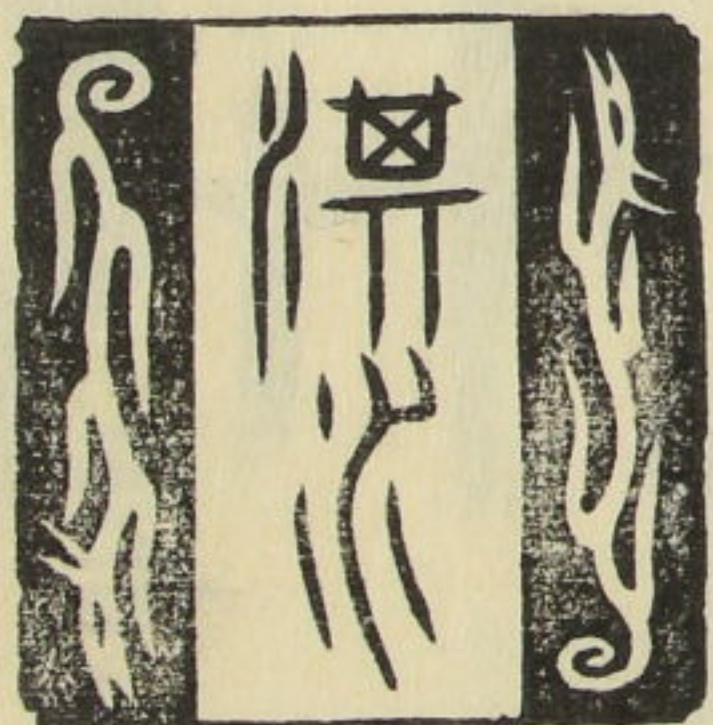
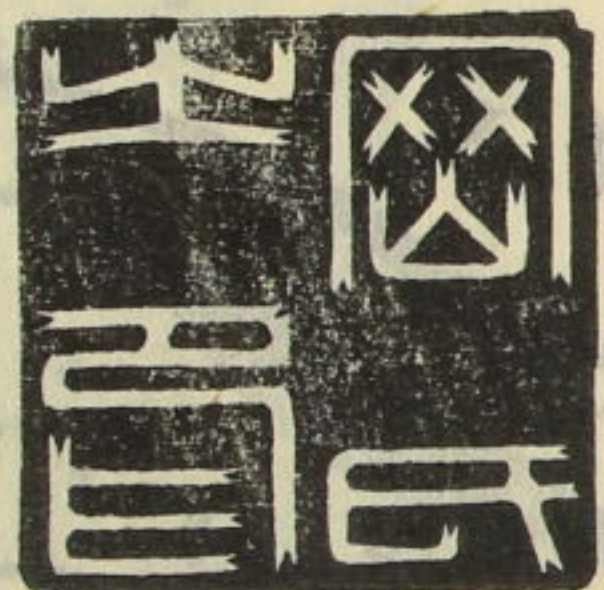
くらもかきる地とちぢめと連中うつ海城同  
 志りし事僅小一編と思ひまじり追福に擬さん  
 ころり然るに生糸の公事のはくはくは  
 東武の存社より東武の象沼に種をまき家  
 秘はらまうし共社多あう揚柳舎に備せり  
 むら中少も去年は首夜筑紫の紀行心のと  
 長途にて名もあつぬ火の浦にへに八十巻  
 うけて尺もあつぬあつちらううあつちらう

一、其の御乳子の都は藤原もきりぬら  
 ありはのあつちらうあつちらうのまじり  
 石の芳しあつちらう一大事の兆やきん  
 著る林もあつちらうあつちらう御城待候  
 類りし事は行の州橋ありてわしは上梓は  
 心つきはもあつちらうあつちらうあつちらう  
 御うあつちらうあつちらうあつちらうあつちらう  
 せいのあつちらうあつちらうあつちらうあつちらう



求せし處にふもあらしむるを以て紀と号して後に  
 附——く西中流と題せば流してをめぐ  
 るの表系とて流のそあつて十英里のん  
 含めたるりそりしはせといは奉の初く  
 といはち子敬う致すもに亡せんといふ  
 世ふあしはさえて狩子歳に鏡子朝と侍人  
 とあり吊門牆の末にあり人くめ  
 といふ布——て負薪の志と述ぶといはし

安永二癸巳年夏日



系代号  
 洪永水



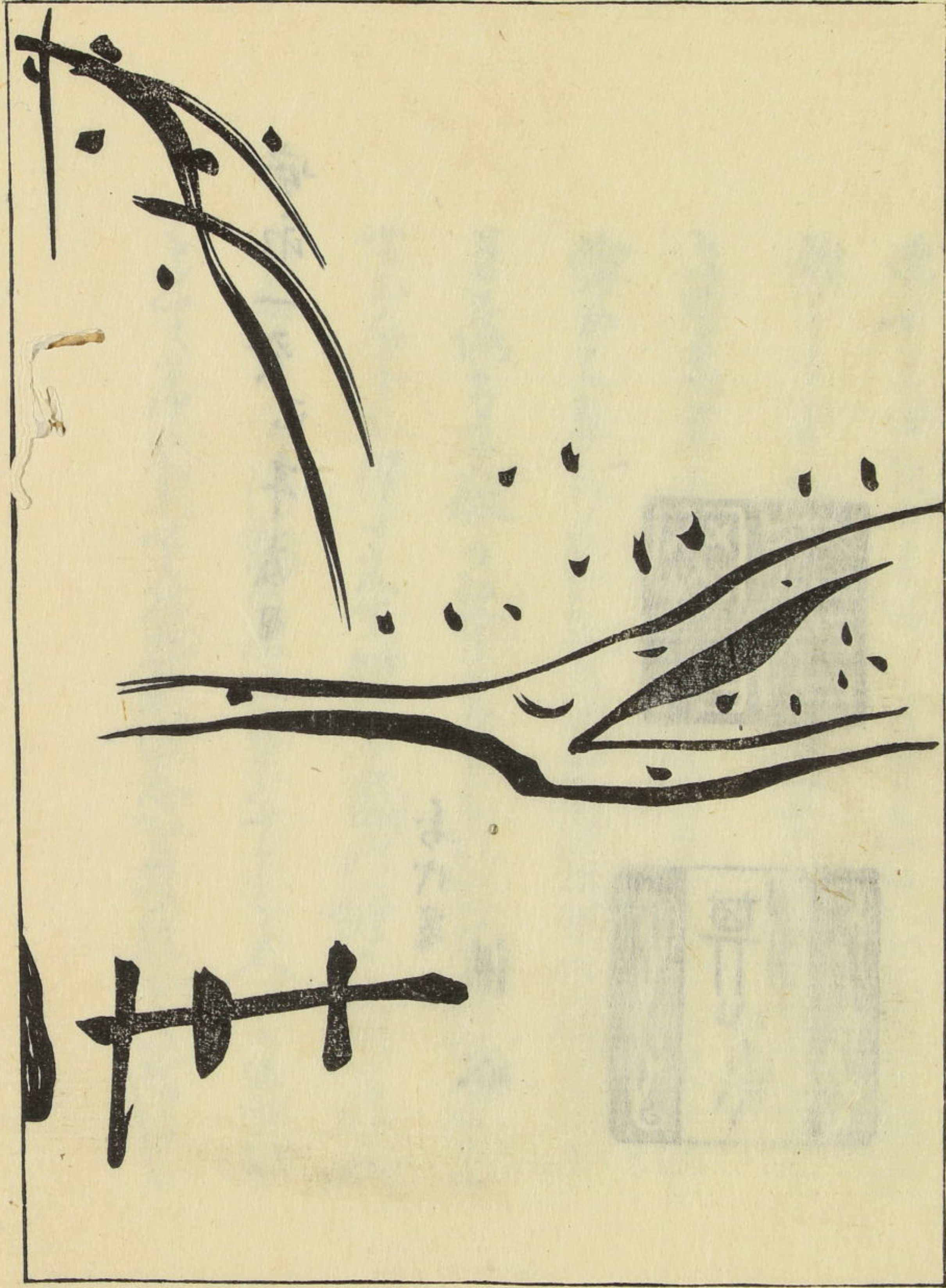


四

五

折句  
何  
梧桐井共貞居士  
及  
田

暮  
三  
画



四

三



西  
居士譚房衆姓真野氏住干越後州  
沼垂鄉居士自幼好俳諧頗窮其伎  
風流自喜不知老之將至矣自號梧  
桐井右之遊方且周探勝幾盡好事  
之徒從游甚驩焉內深歸佛晨昏潛  
修雖家人不知志之至於此也晚隱

居養素癸巳春罹疾日以危篤及大  
漸期執翰爲詠蓋配阿彌陀三字俳  
家是謂折句又手書辭世詠訣其門  
徒卽倚坐合掌專心念佛安祥而終  
焉壽五十二寔安永二年癸巳二月  
九日矣孝子及門人葬于鄉西福寺  
乃建碑石彫其折句而使余銘之銘  
曰諷詠唯適意逍遙佳境多久憶西



方道長逝邈山河人思隨淚碑言留  
辭世歌莫謂十萬遠春風一念過矣  
已之夏武州小札現泉谷惠彰謹誌

無信五十二  
神  
遠  
所  
身

病中望

瘦了もと引立家帯り妻如总

ひ一ある我け世の余をまう一せん流る

いささうく嘆く我には何と五日の極念

病苦もこそぞやまうりにあそ思ひ得家

寐うりの神にけり家余をうれ



辨世

一鞭引て彼土にいきし

何しとあし

喜出—の

るわ日思も

十英里

徳國追悼

石之のぬ—年回

至悼旧好く情

迷ル子訂半—

因て前古略次

思ふ出の日也

さす—ためその日家

乙休坊



幸一殿より一十英里の日志を尋  
其地何某悟相上人の葬所あり

其地の計を以てゆへは所を尋ねて  
ありて去年の暮林より去る筑紫京志  
橋より小舟を乗せしれしもう一  
又果敢のてしは所を尋ねて今更  
甲斐の名所を尋ねしれし

ありき候

折もさ甲しあはせ

馬飛  
い本坊

水の日志あり

名所書略

小方

こしれしふ事ありてもその人び  
あふ事ふと佛もそふりて我の目  
山吹やほしし向もそ流し  
塚を尋ねて風のまはれし柳し  
湖全



夜ふか加ふるを茶や日向の日先二  
那送りやたぐりに月も鏡 孰言翁  
ち〜と帯手向家柳う那糸掛  
日向此教小笑 流小橋の船 和香  
さむかぬ寂しきも世なる白の白 春里  
空けつる日向の連や音ひ〜り 涼花  
け方もそよめ雪ふたぢぢる候も〜らふ 五糸  
懐もよと〜り歌 玉のあり〜 八 祇尹

啼泣れ〜け辱もこ〜ぢぢの招より 冬草  
塵〜吾も泣れあき 春の白 玉路 桃児  
う〜ほぬ 音も嘘の眼とあ〜り 花六  
いひ出た根ふや 氣の急を流り 其葉  
ゆ〜に酒〜き〜 ぶれ葉 冬柳  
吾信のうねるも〜り 春の風 文文  
あねるゆ〜り 流小照〜 春の念 お羽大石田 只犯  
戯のきも流〜り 流る日のあけり 風宇



みれさるさきふてく居のき休居臺仙  
 へりし流——子向を梅の露秋好下香き仙如  
 ありれ中もさきやうらの月 露 寮室  
 空久飛次もく河と流りにおとろくら 里出  
 ありしやるふもろ、ろ 暮の西 看音  
 佛の問え——うへにもく河 梅 且水  
 乙きも元と志河めてく朝 静々 玉枝  
 子折まこ子向を直くに柳う籠 以 奉

藤切家草ふへあるにけり、うねちゆ波紋  
 暮古とせめまふ向ん川む朽尾む 宿 里  
 去折ん流やせそにけく——ち板標 示  
 暮のきや清るもやと——暮のき 鞍 氏  
 色と今むも柳も子向うれ 洞 里  
 世のき紫まけくうな——や暮の約 陰 吾  
 静ふもり小陽をのふりやうね 志 依  
 暮中もかき芳——、暮のき 子 紫



笑むもあはれしきく花あらしと 尺村 卷二

あはれしきく花あらしと 尺村 卷二

あはれしきく花あらしと 尺村 卷二

あはれしきく花あらしと 尺村 卷二

あはれしきく花あらしと 尺村 卷二

あはれしきく花あらしと 尺村 卷二

あはれしきく花あらしと 尺村 卷二

あはれしきく花あらしと 尺村 卷二

あはれしきく花あらしと 尺村 卷二



やうくのむらや抄の人免の老 新伝 本定  
ふるやうに今嘆息とあの昔とを 井原坊  
名を知らぬくさるほの春のぬ乙英  
清き世や水の泡とも啼 桂梅兄  
あしおやその云れ葉もむらうらみ 里朴  
さうらうや雪消——いぬりあ—— 山樹  
鳴の中う金うり煙き川 春の鳥 咄哉  
併やまうそ其候にそえの月 富本

うね人や 實に春の初新長流—— 貞老坊  
うけらふに似え人の世も抄新—— 夢 章流

昔の月をきく新流方の風を燈小追悼  
の白とをく人も海陰の鳥とをくにあつて  
あつてんきくそ時昔折小玉わらふ  
あまのあつてん



札右

亦作梧桐井小松くわていてはくわていくくわていの  
 意也と観され今い十じの志しをし  
 指さすさ微み笑わの切きししるるはは信しんととああくく  
 相あいいひひ一い巻まはは松しょう栞し舎しゃへへ譲じやうくく  
 今いももききくく笑わふふとと海うみをを松しょう初し心しん傳でんの  
 教きやう示しとと丸まる小せう文ぶんををとと由よしににししてて  
いままにに 松しょう舎しゃの  
 不ふ懐わいととややいいんんととややそのその日ひにに扱あつつてて志しをを

捌はちち不ふ来来うう多たううくく所しよとと大だい山さんののりりししるる栞し  
 杉すぎむむにに甲か斐はいるる紀き哀あい傷やうののややももくくくくもももも  
 柳やなぎうう連れん流りゅうとと勵りき由よし一いくく送そう書しよのの教きやうををととしし  
 ううちちああややううきき遠えん冥めい眠めんととああららししととししんんやや  
 ともともにに信しんのの  
 清きよもも采さいののくく  
 松しょう舎しゃをを

抄 終 焉

田



古位悼

今世の世や秋夜もきりーなほ  
涅槃會もきりー世一きりー  
くりーと操くーーや写まき花一系  
悲葉せん名も山吹の折ふゆに 梧鳥  
さよ甲ふ人におく於て 月 <sup>了哉</sup> 南枝

あはれも秋夜もきりー 啼 桂 花 鈴  
秋よりこころにふくむや暮る夜 中素  
惜まぬいふも秋夜の吹くく 晚翠  
秋夜もきりーいまにきりー暮る夜と 夕暎  
かきくもきりー暮る夜ありてえく 先之巴  
わくすねたきりー立候ふもきりー 新流  
くはむくきりーしむし柳 <sup>行舟時</sup> 八 九  
老の世もきりー暮る夜ありて 夕暎 冬夜



ありし時もさうし何とあふ棲りぬ方隙  
 ありともぬの空へくくあふ思徳  
 清きにあふ礼や形造の及ぶく  
 昔の強引もよき柳う輪松州  
 春の扱志あふくけりくきり  
 も向ふや一輪梅れ咲合せぬ  
 世あふは世も遠と栞る時切碇  
 舟きくまにに栞るまきり船  
 下戸

とうとうや今咲く新花も下戸  
 咲く待とのと手向のそ免の舞<sup>了哉</sup>矢和  
 瘦て即ち啼や死る葉もけ別途 蕪菊  
 見送るも甲斐あるは道のあふ那のり  
 昔やや人あふて栞るあー 風語  
 ありれ語や履む波岸うられ松白  
 襟へや手向原とあてさうー 冬波  
 ありれえちる 昔きほくきのそほさ 暮三







一園見

歌仙行

春白や早秋の歩も塚小州

陽白雲  
飛了

實にあらねども夢も夢の世に  
公酒にちと疎くく引くも  
立場て夢へ流る霧の物米に水  
新錢の今とて唐のりりり  
上の授と手塚おとやうえ貞

極出も極小極くも月のか  
運におく終てあれえと何層  
持ふ小彼存終て我をさすも  
南さく一線くさんま箱切破  
花鍵も珍造くちある戸あ教  
お坊まうせに責のやうのと  
身いも道理自然の骨卦入  
神さく一めれ飲ふ水持鏡



杉屋の柳さうくくお寂——官物  
 木の茂るまふ 流る、音之  
 永新日に氣母もきりまはれずまふ 乙巳  
 到こと喜まふ家たふくくうん  
 誰はく紀前の旨に下お舞セリ  
 目う見くくやう操舞さうくく 免琴  
 坊くお舞さくにまうくく持安り 手波  
 ちも新ふゆむ振ぬまの井戸 八九

大柳みを無事不思後の内法刀思儀  
 早んさくへやちんに候 榎 書卜  
 くくくも困極喜ちくちお費埃り 松西  
 あゆる氣の又くくも又 笑お  
 涼くけぬ氣くく意後も倦くまて 堤柳  
 洗濯羊の舌——鏡——虫取  
 月も満く音の日掃一の思ふこと 道取  
 裡園くくぬくくくくくくく 大庭 丹波



三  
想變に如天宮の醫者あり 肯譽

詩者如くり 〽〽〽ぬ 纜 〽

村吏の如く思ふ 中の如く先 〽

〽〽〽〽〽〽〽 〽〽〽〽〽〽〽 〽

殺くのと糸のさふ猶せまり 〽

〽〽〽〽〽〽〽 〽〽〽〽〽〽〽 〽

〽〽〽〽〽〽〽 〽〽〽〽〽〽〽 〽

〽〽〽〽〽〽〽 〽〽〽〽〽〽〽 〽

三四忌

奇仙抄

乙頭峰  
〽〽〽

〽〽〽〽〽〽〽 〽〽〽〽〽〽〽 〽

〽〽〽〽〽〽〽 〽〽〽〽〽〽〽 〽

〽〽〽〽〽〽〽 〽〽〽〽〽〽〽 〽

〽〽〽〽〽〽〽 〽〽〽〽〽〽〽 〽

〽〽〽〽〽〽〽 〽〽〽〽〽〽〽 〽

〽〽〽〽〽〽〽 〽〽〽〽〽〽〽 〽



江戸くともきもあしんく物の日井波  
 録里もありに時分物未セリ  
 新條小新酒にそとく付もく  
 是所新条もあしんく  
 秋籠の青とくさ噺り律うも切張  
 子あれの急に唐人も泣三巴  
 賞竹と録り書りあ 春の母風語  
 二十八日白きお日おえ身

う屋根もあしんく  
 天定所くぬ公家の領分 著之  
 目録小娘入のあしんく 一系  
 夢んくくあしんく  
 築本もあしんく  
 録り磁石もあしんく  
 看板のあしんく  
 録りにあしんく



彈定りて明の古報此唱てく  
 相尋花咲高塚のくち  
 陀鉢に色水の乃如猿轡り  
 おもろくあれ保夏の院宣  
 地柳  
 細眉も髪もあまそ月志ふと  
 鏡にぬくひ根の枯涼  
 招白  
 露何くも葉子も仲秋尾を  
 知り  
 心づも器もそと  
 為ト

二  
 高くとくも四十越るるり  
 坂柳亭  
 小隊ふる所て  
 朝  
 今唱へよきその  
 朝  
 掛ふき歌う後も  
 眠  
 忌日たうへ  
 波



七年忌

哥仙坊

釣月餅  
留後

ついでてまのふ彼岸小入——七年忌

らくとも向せ庭の初茶 夷字

暖くは花のまもきささけく 以文

世間別つゝをる好なり 道新

歌と讀こゝろを志く新と交賃あり 善三

り終ふ引くへて 燭 臺 書白

吹<sup>ウ</sup>同くも吹てう風も月も和 五典

梅州町を舟も指合ふ 笑和

書又入にあん——母のソいふくめ の眠

ちん鏡志やき物と星々ぬ 慈氣

帯うけぬ隠——災屋もあひらちち 為ト

お替りりきん水軒 代 宮 切砥

まろふれてまろふと約の靴名靴 幸家

編きせまふうけ 依り 雨 八九



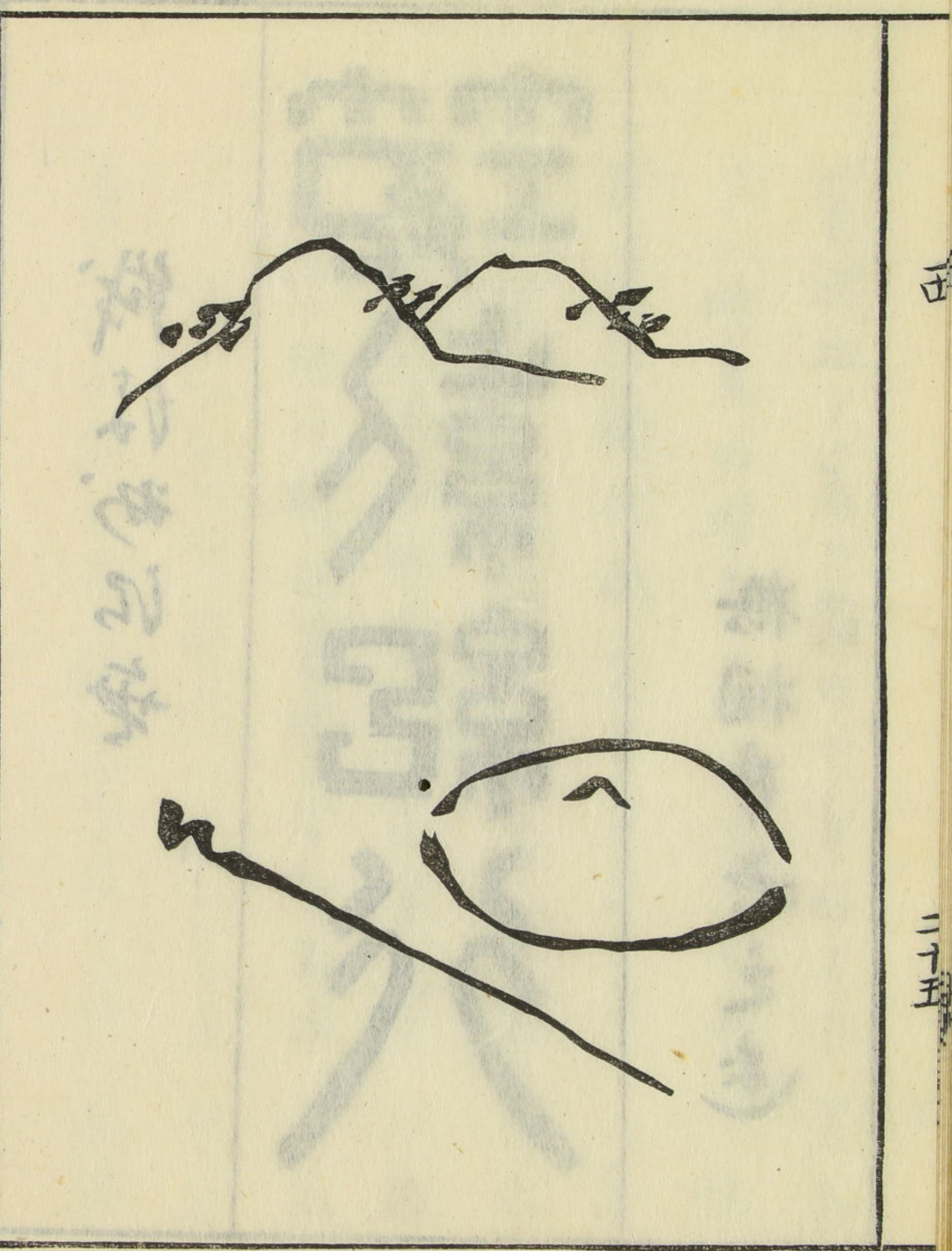
正美の冨帳佛も、くくくく、  
 たんこ体く小妻依中仕在 凡語  
 山あしもおあし橋て者あし、  
 三巴  
 石川くるとあし、まの目如 歌  
 志波  
 志波と祈りて橋の身張ひ  
 注あ  
 将世家子もと手下あし、  
 芳際  
 むまんのあし、  
 人比丹 元貞  
 河原の石れ、  
 思徳

糸に緝小唄く、  
 糸に緝小唄く、  
 思ひ男に始入いや、  
 井波  
 見通し一の神もおあし、  
 せり  
 又費ひく、  
 松冊  
 市菜も百に五神の、  
 境柳  
 重宝記とて、  
 冬家  
 次へも、  
 格多









卯月朔日と何うも前途は祝はるる也

今を隠居の身とすれど何れも度々

ふもなほ

梧桐井

御徳や旅きり  
右之

あゝ路うら

己之身の先ありし徳董一軒と

何夜日子此社に秋——り秋は



子采の真意を祈りたまひ

やうき言のまもりしる燈籠

伝

柏原の彈より三葉をくり出さるる

多分右不越後の妙香山の紫花よ

黒形版図すまはた大にけりあり

記りまきまらに晴るる東林院よ

キ刀雄九頭竜のぬ社をねりし

院よりありあまのこころとるる  
と敷坊に二枚のやりのとりあり

戸隠や回あしりも三葉の産り

善光寺に名をいせん

如來おに顔実信の折るる

ゆるれ物語りせむ

おのりおに花女も病り

かくおのりおにふり



何れもあゝぬあゝたともさる由

正合の舞臺や袂のゆり河より

文科

横たも人子座ふや 夏の日林

さうりぬとく際く今宵の月とる

白き子も河の山越に下道へ出れ

木曾路

ふけ橋や今のき下り 郭一公

寝枕に森元の里北 名もわたり

員濃

桑連中

ちりたて夜明まの許とるゆあり

手に書きたり用とあはれ

右之

看別集くこく後むきあり 吉屋

何気多心のい初おとよはに 茂新

おるへうあまうの杖持とくともけり 五若



市の傍り此家ももすれ山と鳥羽  
 有風呂の加減に月も指の、里公望  
 夕歌けりぬき隠の屋根素々  
 悟らぬやうくと急とまきうら  
 生鳥

右段より一取

吾様扱おとろ

流り今人多家とも替る山路きけ 茂物  
 紙の客にとてふらん卯のむらさき 生鳥

ゆくりきりふちあとも嬉—— 風車 鳥羽  
 後々々解あふはや 文衣 素々  
 有るぬ花多や 夜に秋 兼時 玉里  
 んるき鐘や牡丹 此等と有り 五若

波山下

二十余年山と有るい石ふあふ稲葉山の

麓と有るい石ふあふ稲葉山の 知事

へくち古人とありて謀に十人の酬和



九人無といふもそれをもまゝに懐四と僅

友陰も友とてゝる界の松とて葉

北方

幽室を仙の机下と窺ひし事

右之

水とて新ふはむとのう社あり

淋——これ唐同する涼——さ 幽室仙

村杖志机と先河と片よせと 秋夏

吾類ありた略

友名人く皆所事にある

まかけあふ葉を種とく 右之

生陰の折もこうそあれは北あり

子規うりのめはく——い 聲 秋夏

挨拶もあつとるはく——く 拙訓く 幽室仙

店小換葉の壺といふ川ら 店推

ウ 朝も今三日月形りに折り折り 又織

おりのせし心——ても机を 机あり



此より笑めて見たり見たり  
 見たり見たりも 投網の果 呂歌  
 多し〜と細くかぬの味は〜 杜若  
 吾娘育りた略

卯の星月中流然の梧桐井より人に五竹居と  
 訪りて宿るう河と〜  
 吾國の春に心残りしてうたの飛流を空の  
 味いふ新古は海ありと〜

古系りぬく虚實の 物事山

謎以解せらや

尾張

伊勢

高より七里の雲合船もた〜の道は風に  
 海を〜とわ〜く葉名に〜地を〜  
 ちるせ〜人もあれ〜河沿の大岩  
 ち〜の〜と〜の〜



傳へる多日市のこゝろ

船の着やうく　　さうして新業うれ

龍虎山ふかす朝にせうく　　あふ人の争ひ

釣座山うねり世に余ににゆり控ふ

いづにるりりり　　あふあふあふ

又様義集の附合ふ

橋の系のみ　　あちうくあちう

あふのけい　　えに越る龍座山

あふにせいのく　　は事と思ひ合ふを今

附合を古あはれ　　あふあふあふあふ

迎い

あふとあふ　　あふあふあふあふあふ

あふあふあふ　　あふあふあふあふあふ

山城

あふに越る　　あふあふあふあふあふ

あふあふあふ　　あふあふあふあふあふ

五



卯のちとささくれ差と先ぬし

悟相より人と縁縁のうらもあふき時

途中より

吹ぬ日も戦ふるふりこし一牛ふま

ゆきゆきと梅あふさる道まをえ送り

松浦あはれこころ物一ゆりあ

秋小又と差すしん 子 松年 今

端午にまは日都とさるる

南別のこゝろと述る

熾るゆるすく梅とあつりく

橋津

端午の佳節は信をさあつて

芦川のさくらと 似てや 高南

和泉

紀伊

蟻通の宮より

下馬れに先氣のや木下署



今を四葉のときにして七葉の和歌の浦の  
あしりのあつらひのさしづきいよの物語  
せしと亦も又は新にあらはれし  
あまのなほほにおもひきりたまへ

梅白晴の神もぬもや片男波  
淡路

讃岐

加甲より船と舟とては國へはる折る

此のよきふまうきく假名の詩とけり  
一里と傳はる

牟月の夜も晴るありてや  
船漕かせと流る 志門の  
子等のあつらひも葉にあらはる  
手にえらりり淡路 金山

このひる中に候とあらせし高松の  
城外にゆく和歌の鐘もあつらへり



明やうふ月もあがりり流南くは

多幸んうけ侍り 金比の山系路

其より 高野大仲の四郎善通より

乙紐山へおるに西のは海をく

位路のたふれのおあふ 彼山家集

そこのちやうとるを

永くりあふくま今も清水ふ

後

讃岐丸番より布帆涼傘にそつて侍後の

尾道に名実よりおをれり之歌くはち 田村

のあつりたりり 福を被り打鳴り 田村

流の原雲山くつ別ぬきの風流ももどひ

侍りくそ向あふも首屈りれはは程ん化

侍り侍りくまそくあく通つ思

安藝

廣野のれ謀下より船乗り 表崎へ渡り



い所の佳系よりうりあしとよの詩歌

心と傳へし一了他傳より傳く説好

の巻と抄一今予て伝を傳ふと云

其もあふれと具小宗一をさすふ

凍風や満 見る汐もいづ久一は

又可連をれおのりも初中も原

ささくれや裏と山一と 叡 岳 東 推

周防

岩室に錦帯橋とけり系不実より傳ふ

高直松傳の伝事ある金一

橋の名れふ一と千了や己月晴

長門

豊前

筑前

赤間と并に志浪弄より伝籍小伝を倉橋を

河東の市石をやくりり寄進も結んりられ



其意のふ念に清く思辨しつゝ亦に一石一瓦  
 期りて香粧の之箱は八幡宮と物まのり  
 樽多し思て名産の祈り極小旅情と感せ  
 大宰府の 聖廟と云一りりて頷けり  
 仰高の二寺もあやん。

その岸ありくはそ舟よ大感徳  
 福国の城下より一里くくりさくさく  
 旅情を息と休えて

涼——さよ 汗入るるうら せの松

地刺

善きを信ずりて良は信をとりて假物にあつと  
 懐立——くそ程非れどく免後つるふやえり家  
 筑紫の侍の出来し海よりそ語信事は旅  
 産ありていひなれを道當の目殺あくを杖  
 其のけしあうせて潮水は月のうら小崎陽に  
 だくり思ひも所庵院船えり福と唐船



教艘入るるを唐土船の横りて架  
折を丸山の風流も他に異るる教艘を  
地るるを

風の多や唐土船の横りて架  
い津の人く小いさるるに船控ひせり  
遠く屋敷船ありて高にとい風ふ人あり  
舟の人もありて彼を海を教艘に控ひ  
控船と仰めしに漕せしに実あり  
又る事

ゆるの度め記き家跡遠ありありを  
海を——磯嶺をあらうるな月  
筑前

長崎と五日を之系しと新船と成り徳平  
へゆく船と唐土船後柳川をい海と二十里  
い崎系天多ありたりと之柳川の漕世五里  
いし泥の海あり目も傾く此小島岸一と  
海の泥楫にうりて異るるを



ふらふらと玉垂宮と稱し望むる所なり  
其後一峰寺門山銘西一池の本山あり今も昔  
念佛たむる波羅宏上人の初堂あり

豊後

羅漢寺

北極く涼むればあり羅漢を  
麓へりて二三丁とわ岩山の如しあり  
と云く羅漢北一山とも云く靈場と云  
と云く

阿耨耨山とも稱すめく金堂あり  
ゆりし折く異字の字と云く  
より西くは中津へ出く松州宮あり  
船と云く海路百金堂におもふあり  
ふらふらと中国の残像と云く  
はらふらとぬ火の流しあり  
先にもあると云く  
よりふらふらと云く



室の津にまげゆと船中の遊戯あるま  
み

三ツ物

磯山も霧をありつるや蝉が聲

移るゆゑの、味久、立のき

みえし何とぞやに亮何として

揚塵

み月終りき曾根尾と高砂と二又と

之ヶ所とくに松樹の佳名無ふるりれえ

人先へ雪い合鳥、々、船の林

途中嘆

寂しきの杖の出ふや頃廣の浦

橋津

青子の橋はふせりとありて

三四りの湯浴ふ星の一抱うな

橋者の盆會



権の系れ書きもあり連の飯

予十番をくつん風きの渡いにまうせ東武

他門の全義に犯し神風や伊勢志深秋

折ぬくとも志以運して風符よりなれ

いふは風の是理とてまのいかりりつか

らまもあそむ此湯本にこそ小我の悟相人

あまの二指下に他指さあそ平生あふことと

自得よりあつてあふ眼あつての眺をとる

後不迷ぬしと冷教あつて

り希  
た末

山いらのそくからあまの初お糸

うらなおるも月あつて物晴 ち之

年あれて波岸あつるとはまのそ <sup>素</sup> 文

柳ふまうも 意さうなれもの 本

能あつて猫と春も合ふやう 之

此の一字に世界春 年 交



た末の如くちゆる念記家持もなりぬ  
新相をいふの持もる記より一せきき水の  
日ありくしりとていふまゝにせぬ歡ひ  
あれを必し恒の産業以てとえりてさる  
浮名を恥く侍刀ある日世世に持て誅  
優游れ人ともいふ侍とて在望の親切  
いふ學れと懐忘下には事と叫び侍りぬ  
今海りるもとくある所阿茶

家の名湯に諸人老病苦と治さるる死と命  
御佛の慈悲心ありとてさるるい侍り

至るる病のめらるや茶師州 又ま

秀吉公喜ひのつる阿茶院堂殿の茶の家の  
南着院の汁物ありとて寂寥ありとてあり

茶もいふと谷のつるまゝや林の春

山味

洛陽

結

一書



西海恙多くありし都にせりし一足紙  
 人々も逢ひの骨と懸めんともありけり  
 月はくろれありけりを山雲のふり  
 ありけりし程ありけりありけり  
 猿果飯ありけり

東にきまの月

後別

あつし大津のきまの月

逢坂の果飯や芳の立あはし  
 文交  
 於てやもし遊しにいさみ  
 立  
 桃  
 見  
 天目に新酒祝ふや奴系  
 屋  
 花  
 六  
 紙前

當國の所々に多年交通の仇も多かり  
 けりけりし程ありけりありけり  
 古郷の宿りにてありけりありけり



重移りぬり掃のちりく心かき  
おこぼるぬ

途中吟

舟楫や一艘 くに霧も晴

加賀

け玉の石物るれとく反とと経多く

笑笠にり和もほくけ赤塔燈

津懐

ふれり人の隠家と移移く

氣の多やあり家くるれく相輝く

今も互の隠者ともあはる者之れ人

と節く一と

ふ自由と和ぬ中より一層の林 見ゆ

紙中

紙後

言ゆきえり村又晴やうに能生  
の葉



今町のく人後傳えし

氣の目や 山さゝ 嘆く海を洋

与板の奴族は侍傳へし二三切足

遠苗は長途の勞と志る

起物し

く路まゝあり

葉のむ

帰郷

歌仙行

去之

あゝさほふくも旅あてお糸う籠

待望の信ふ月 新夕 葉山文

お磐しぬそけふそれほど切別く 先序

湯氣に土瓶の蓋うかきく 南枝



ちとせふんぞれと青藤分借在補 晚翠

二十日てふふふふの 朔日 松西

五酒の癖に引こまの 賣切 兼和

近所の親何の 子とふふ 兼和

燈明の何れや 燈系に 百々 兼和

養ま一甲に 飯の俵出 一 堤柳

片足にふふの 了も 燈の 何れと 兼和

口まき 何れも 忍事 表具 兼和 出給

朝に膏何や 免も とも 三日の 親セリ

風呂 高家の こと 何れと 兼和 兼和

本くと 何れ 何れ 續く 何れ 兼和

云葉 まま 何れ 何れ 四國 九州 松西

夕時と 見合 何れ 何れの 兼和 兼和

二 飯 兼 何れ 何れ 兼和 兼和

想 兼 何れ 何れ 兼和 兼和

兼 何れ 何れ 兼和 兼和



柳野小いやう流木のざれうゝまの岨  
生々之根深き大根の中層之  
六部の市姑留も一といふもろみる好

古出席一紙在略



安永八己 亥年如月日

書林

東三條寺所  
梅屋治衛



